

公的保険アドバイザー協会

第1回公的保険アドバイザーフォーラム開く

金融サービス事業者の役割議論

公的保険アドバイザー協会は10月7日、浅草橋ヒューリックホール(東京都台東区)で第1回公的保険アドバイザーフォーラム「人生100年時代の心構えと公的保険の必要性」として開催した。フォーラムでは、6月3日に金融庁の「市場ワーキング・グループ」が公表した報告書「高齢社会における資産形成・管理」をきっかけに話題となった「2000万円問題」などを取り上げつつ、今後の公的保険の意義や金融サービス事業者の果たすべき役割について有識者らが講演した。基調講演では、社会保障制度改革に取り組み村井英樹衆議院議員が登壇し、新時代の社会保障改革ビジョンについて解説した。会場には同協会会員など、約200人が参集した。



土川氏



村井氏

開会に先立ってあいさつした土川代表理事は、生活者の多くが老後不安を抱えている理由について、公的年金が保

険であることを理解していないこと、モデルケースを自分のケースだと思ってしまうことによると指摘。こうした誤解を払

拭(ふ)つしよ、するのが金融サービス事業者の役割だと述べ、個々人のねんきん定期便に基づいた金融サービスの提供を

そが正しい公的年金の知識の提供につながることを示した。

さらに、金融サービス事業者は単に金融商品を売っているのではなく、公的保険と民間金融サービスを組み合わせることで国の社会保障を支える存



活発な議論が交わされたパネルディスカッション(左から山中氏、中野氏、友野氏、土川氏)



200人以上の参加者が集まった

在だと強調し、「金融サービス事業者がお客さまの良き伴走者として正しい知識と知恵を持ってサービスを提供することができれば、生活者の将来の不安を和らげることができるとはならない。その上で、生活者一人一人が将来に夢と希望を持って生活していくことのできるサービスを提供していく必要がある」と語った。

フォーラムは7部構成で行われ、第1部では取締役兼CEOの中野晴啓氏、FWD富士生命代表取締役兼CEOの友野紀夫氏、土川氏の3氏が参

加し、同協会理事の山中伸枝氏がモデレーターを務めた。

「2000万円問題」について問われた中野氏は、話題になったフレーズは読み手になりやすくなるために出した例えにするなと説明。これを受けて土川氏は「この問題が炎上した責任は、ねんきん定期便に基づいた金融サービスを提供していなかったわれわれにあると感じた」と悔しさをにじませた。

これを受けた中野氏は、確かに一瞬炎上したが、報告書の内容が周知される中で、その中身がまっとうなものとして評価されるようになったと語り、「われわれ金融サービス提供者がこの機会をこのように社会の文化に昇華させていくか、勝負どころか」と語った。

プロとして、生活者の良き伴走者として

次に、保険業界で多発している不祥事と、顧客から信頼を得るための施策について問われた友野氏は、問題の背景には、顧客本人や顧客志向の意識の欠如があると述べ、「保険業界に働く者は、自分によく知っていることでも顧客は十分に理解していない可能性がある」という情報の非対称性に留意する必要があるとの見解を示した。

中野氏は、ほとんどの金融サービス事業者が販売目標を掲げながら、顧客本位をうたうこと自体が矛盾していることに気付いていないと指摘し、「顧客本位というのはそれくらい高いレベルの理念だ」ということを理解してほしいと強調。金融庁が、ルール主義の「ミナムスタンダード」から、自分たちが施策を考えて実行することを促す「ベストプラクティス」へ移行したことの意義についても持論を展開した。

土川氏は、不正をなくするためには金融サービス事業者が勉強し続けることが重要だと語り、「正しい知識を身に付けること、お客さまに正しいサービスを提供したいと思う根拠になる。保険業界の人間はプロとしての矜持を持つべき」と語った。

最後に、保険会社へのメッセージとして、公的保険についての正しい理解を踏まえた商品提案を要望し、講演を締めくくった。

第2部では村井議員が「人生100年時代」公的年金」と「年金タックスユボート」の可能性」と題して講演した。

最後に、保険会社へのメッセージとして、公的保険についての正しい理解を踏まえた商品提案を要望し、講演を締めくくった。